

# tab

No.  
27

2  
0  
1  
1  
/  
05  
/  
15

後藤美和子 / 木村和史 / 野村龍  
福島敦子 / 石川和広 / 岩田英哉  
水島英己 / 秋川久紫 / 長尾高弘  
倉田良成

榊 || *Machilus thunbergii*

cont.

詩篇

- 後藤美和子・風呂敷／01  
野村龍・寶石／02  
岩田英哉・階段／04  
石川和広・胸のうちは／05  
長尾高弘・見えないも／07  
水島英己・Tangled up in Tongue／11  
秋川久紫・舞姫（をどめのすがたはしんじゆめむ）／13  
倉田良成・野兎の口が割れている理由・脱出記／14

文

- 福島敦子・父のまぼろし、わたしの笑顔／17  
木村和史・阿寒の渡辺さん／19  
倉田良成・尾内達也の試み／21

あとがき集／25

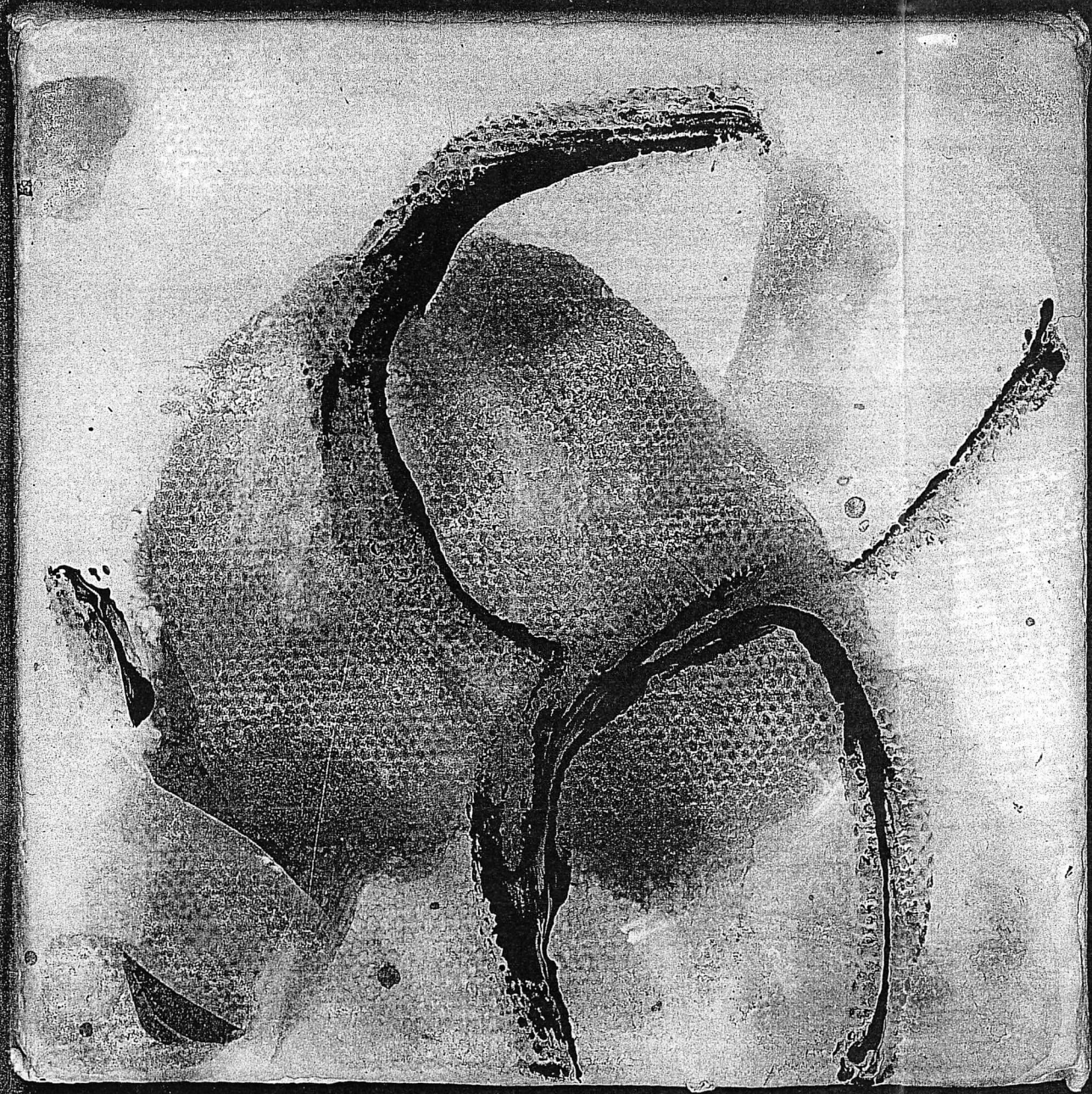
画・和田彰

BD 第27号／2011年5月15日（毎奇数月発行）

編集発行人／倉田良成

〒230・0078 横浜市鶴見区岸谷4-25-25 鶴見岸谷ハイツ201

Eメール／kateis11@k3.dion.ne.jp



後藤美和子

## 風呂敷

もしかしたら

ずっと長いこと砦にいて

細い銃眼から薄い目で

平坦な砂漠を見ていたのかもしれない

でもそれは来なかった

(彼にとつては)

もう風呂敷に包まれて

彼は故郷に帰されていたのだから

だからその時石段の下に

足も持たずに座っていたのは

彼ではなく

友でも姪でもなかった

決定的に数の足りなかった

彼は肩車の肩のひとつ

手の甲や膝頭のしがみつく

胸の紋章のはずだったもの

銃剣を研ぎ

肩を鍛え

長い年を待ったとしても

砦の老兵士はひとりくずおれ

ふたりくずおれ

その来襲の時には

すでもう

永遠に放擲されてしまっていた

(皆既蝕五七)

野村龍

## 宝石

種が やわらかく溶けていき

一輪の 夕凧が訪れる

まだ未練はある

が 蜃気楼がもう 彼方で待っている

手袋そのものに興味はない

ゆびさきが 知恵の輪をどのように解くのかを知りたい

群れから いつも逃げて来た

皆のようには とても歩けない

椋鳥が 街路樹を濡らす

雫は地球だ

《この鍵は あなただけのものです

天文台とともに あなたに差し上げます》

ゆで卵と

掌の炎

それから

観世音菩薩と footprint

苔むした巨人が

絶壁の縁で 角笛を吹く

神経質なはずのコンピュータは

辺りを憚らず 緑色のおおきな欠伸をする

待ち合わせの場所に着いた

日焼けした 笑顔に付いた指紋をぬぐってみる

岩田英哉

## 階段

― 莊子曰く、「往け。吾れ將に尾を塗中に曳かんとす」と。

わたしは亀だ

いつも泥の中を

尻尾を泳がせながら

歩いている

泳いでいる

亀は階段を登らない

亀は階段を降りない

亀に階段は無い

いつもあるところに居て

遊んでいる

(そこが光源であるほど  
よるこぼしい)

(わたしは死に近づくが)

この宇宙は

一匹の亀の背中に  
載っている

という、ある民族の神話を  
思い出すことにしようか

## 胸のうちに

ご飯を食べながら

テレビをみていたら

昼の日中だな

かなしいとかそういうのは

すこしちがう

ちがうというか

春いまだにこたつが置いてある

そこに足入れている

電源はつけていない こたつ布団に足を入れて

壊れた場所に降り注ぐ雨を思い日进行

思っただけでは届くことにもならず

僕がしかたなくそこにあるという

勇氣ではなく惰性である

惰性でもあり存在の完全性でもある

心臓が痛く、心臓だか胸のこのみぞおち当りが苦しく

息をすると冷たい息のかたまりがはいるよう

味噌汁を飲んだらあたたかい管のようだよ

昼に寝るのを少なくする 働くといっただってどこへ向けて

僕はどこまで苦しい胸の内に

つらいおもいで残骸と廃墟をかかえつづけるのか

そんなこといっただって僕は恵まれているんじゃないのかな

日があたたかい

こそばゆい痛みだ

だまされてでかいシステムに押し流されるのヤダ

システムなんて言うとなんだ仕事システムみたいじゃないか

そうだこのままテレビをつけて

永作博美を見ているが  
そろそろ洗い物をしなければ

僕がちがうといったって君が世間を知らないといったって

僕はこの宇宙の一部

生き物としてシステムのなかのシステムで

美しい緑の桜葉が風に揺れる

波や風に流されていくなにもものか

そのものはどこから来てどこまで在り続けられるのか

無力の力能が揺らいでいる

ああ一日一日を刻む自然権

僕らの無力な統治とは何だ

うたっていてどうする

お前はなんとする 風の飛沫から

涙のある君と僕のいのち

すすめすすめたら、たちどまって

いきながらえてぶんぶんぶんぶん

鉄棒揺らす考え直す

正確に言葉を使って、イメージの後ろにある

イメージの根っこを押さえるのが仕事だ

君と僕との間の平衡がゆれている

測れないもう測れそうもない

無量無量

唱えてどうする 意味があるのか なくてなんなのか

ないよりあるほうがいいか

どういうのがいい？ 振動はまだ続く

これ生命の律動かな 参ったな

まず立ち上がって洗い物して

それから次へと順番にやる

## 見えないもの

\*  
たった今起きていることなのに、  
真実は誰にもわからないことがある。

歴史を書くのが難しいわけだ。

たとえば言えばゲリラ、パルチザンか。

敵からは見えず、

神出鬼没。

確実なダメージを与えるが、

証拠を残さない。

敵の指導者が「ただちに危険はない」

などと言い出す始末で、

意外なところに味方を作る。

もちろん、これは悪い比喩だ。

誰も解放せず、誰も守らないゲリラなど、

あるはずがない。

はつきりと名前を言えば、

それは放射能というものだ。

福島第一原発から、

あの日以来出ている。

それだけは確かだ。

\*

むかし、

「見えないものを見る」という詩があった。

自分の感受性によほど自信があった時代の産物だ。

見えないものは見えない。

が、  
それは機械で数字に置き換えられる。  
数字は解釈して意味に置き換えられる。  
問題は解釈が一つに定まらないことだ。  
テレビでは百ミリシーベルトまでは大丈夫だと言っているが、  
法律では年間一ミリシーベルトまでに規制されている。  
百ミリシーベルトで大丈夫なら、  
家を捨てて避難しなくても済む。  
大した被害ではなかったように見える。  
補償額も抑えられる。  
大丈夫でなければ、  
五年後、十年後、二十年後に  
がんになる確率が上がる。  
がんにならなくても、  
体に異常を覚えるかもしれない。  
ただだちにはわからないことだ。  
主語を除けば。

\*

子どもの命を救うという強い使命感のもと、  
孫社長は車で田村市の避難所に向かう。  
ガイガーカウンターの針が振り切れ、  
設定を上げてでもまた振り切れる。  
しかし、避難所に着いたら、  
マスクを外さなければならぬ。  
避難民はその場所の数値の高さを  
あるいは危険度の高さを  
知らないように見える。  
マスクもかけずに、  
自転車で外を走っている。

危険だと思っていたら、  
そこには避難していないだろう。  
孫社長は、

テレビでは隠されていることを説明して、  
子ども連れの避難民を説得する。

故郷を離れたくない、  
という気持ちは強い。

孫社長が涙を流して、  
どうか子どものためにと説得し、  
その家族はもつと遠くへ  
逃げることを決断した。

\*

こんにちは、私です。

私は横浜に住んでいます。

地震の影響は受けませんでしたし、  
福島からは二百キロ以上離れています。

しかし、原発の異変を聞いたときには、  
逃げなければならぬかもしれないと思いました。

テレビは嘘を言っている感じがしたので、  
ネットで情報を集めました。

よく知らなかった原発や放射線のこと、  
ネットで勉強しました。

専門的な知識を持たない自分には、  
何を信じたらよいかよくわかりませんでした、

最後は自分の嗅覚を頼りに考えました。  
建物の爆発が相次いだときは

明日はもう来ないかもしれないと思い、  
家族と自分の命を守るために必死でした。

一か月たって、

原発はまだ収束に向かつておらず、  
テレビで作業の様子を知ると息をのみますが、  
逃げなければならぬと思うほどのことも起きていないので、  
気持ちはずいぶんだれてきています。  
シーベルトなんて単位も、  
このことが起きてから覚えたわけですし、  
怖がりすぎなのか、  
注意が足りないのかも、  
よくわかりません。  
ただ、あの日以来、  
風景が前と同じようには  
見えなくなってしまうました。  
どちらかというと、  
以前よりも星はよく見えますが、  
見えないあれが漂っているところ、  
地面に積もっているところを  
想像してしまうのです。  
見えないものが見える？  
いや、そういうことではないでしょう。  
緊張感が今ほど薄れていない頃、  
外で鶯が鳴いているのが聞こえて、  
ふと我に返ったことがあります。  
あの日以来始めていたツイッターに、  
こんな春でも、裏の林に鶯が来た。  
とツイートしました。  
俳句つてのはこんな気分でやるのかなあ、  
と思いました。  
正しいかどうかよくわかりませんが、

水島英己

## Tangled up in Tongue

Rain falling on my shoes

Heading out for the East Coast

Bob Dylan

「…舌の先が口蓋を三歩下がって、二歩目にそっと歯を叩く」  
そこから物語は始まる

姉は弟の舌に

父は娘の舌に

女神は

「私の舌をぬらした」

「した した した。耳に伝ふやうに来るのは 水の垂れる音か。」

「蝸牛螺旋巻まじまじねじまき、マ、ミ、ム、メ、モ。

梅の実落ちてても見もしまい。」

「雷鳥は寒かる、ラ、リ、ル、レ、ロ。」

蓮花が咲いたら、瑠璃の鳥。」

きみはきみの舌を有効にもつれさせているか？

Peter Piper picked a peck of pickled peppers.

Sally sells seashells by the seashore.

「立ちましょ喇叭で、タ、チ、ツ、テ、ト。

トテトテタツタと飛び立った。」

舌は齒茎に出遭ったんだ

唇は塩漬けにした唐辛子を嘗める、マラミリムルメレモロ

行かなかった道を 東へ

歩いて

舌先の

奥深く隠れている

下生えの萌え出づる

おお何という春だ

すべての泉は涸れはて

旅人よ

どこまで歩いて行けば

三歩目にそつと齒を叩く

幻影の人よ

きみと出遭えるのか？

きみの舌が引き抜かれる日々 あるいは

きわめて滑舌の悪い老年の長い憂鬱を齒のない唇が

したしたと嘗める日々

空の壁にどこまでも巨大な舌がぶつかっている

こんがらがったまま雨は降りつづけている

(注) 白秋、順三郎、信夫、ナボコフからの引用がある。

舞姫（をとめのすがたしばしとどめむ）

あなたは愁いを纏った観音で、その凜とした佇まいは浮世の汚濁を瞬く間に雪ぐ奇跡の護符だ。あどけないその眷属たちは業火にまどろむ牡鹿と化し、あるいは蓮池に華やぐ孔雀に転じながら、ただ畏敬の念を潜ませてあなたに付き従う。何故なら、あなたは誰よりも疾く走り、どんなに固い岩盤をも砕いてしまい、そして何より数え切れなくらいたくさんの心を折りたたむことができるから。

ところで、富がいつしか卓越した創造の前に跪くという願いはついにナイーヴな幻影に過ぎないとして、創造が必然的に富に隷属するという断定も、言わば一つの軽佻なデジャヴに過ぎない。

果てのない煩悶を抱えつつ、一つの厳選された処方として、卑俗の神々の解毒のために瘦身を捧げる。さればこそ、韻律の鼓動を先取りするかの如きあなたの舞姿は気高く、しかも愛らしい。

とある木枯らしの日に大切な人を奪い合うような諍いがあり、その末にいくつかの決闘が執り行われて命を落とす者が現れ、やがて幕引きには戦争が金色の落葉を根こそぎ奪い去っていった。

あなたは淡く力強い新月の光を手鏡に代え、銀砂子を蒔くようにして夜ごとに反転の儀式を披瀝する。だが、その恩寵の眩い笑顔を正確に写し取り、精細に描写することはとても難しい。その慈しみの美しい複眼は、数多の栄華盛衰の物語を同時に見据えているから。そしてあなたの裸体に秘かに刻まれた値には堅牢な暗号が施され、深海の底まで潜っていないかなければ解読することができない。

## 野兎の口が割れている理由

うつし世と「根の国」との境目は非常に区別がつきにくかったので、ヒトはともすれば自分の知らないうちに、あの世とこの世とを行き来したりもするのである。ヤムタラの森でも同じことで、ヒトはあちらに行ったりこちらに来たりした。そこに関門は存在しなかったのだ。「根の国」にはやはりヒトに相当するものがあって、うつし世と同じく、家族を持ったり山羊を飼っていたりする。ヤムタラの人間は夢違えのようにそこで過ごす日々、彼の夢の家族の生活もそこに営まれていたことがあった。あるときヤムタラの男が狩りに出て、野兎と遭遇したのでこの獣を追い、草原に出た。野兎を遠くまで泳がせ、見ていると、「姉妹の片方の娘」がそれと知らずに野兎を跨いだ。このとき野兎が口を開いてひどく不眠なことを言ったらしい。「姉妹の片方の娘」は怒って持っていた木の棒で野兎の口許を叩いた。野兎がミツクチとなったのは、このことによる。狩人はこうして勞せずして野兎を手に入れたが、「姉妹の片方の娘」のことが気に懸かったので密かにつけていった。進んでゆくにつれて遙かな山巒のような輝く雲塊が狩人を迎え入れる。そこがいつも夢違えにあらわれた「根の国」であることに気づくまで、そう長い時間はかからなかった。住人たちも普通に喋ったりものを食べたり挨拶したりしているが、みなヒトのようでヒトでなく、言葉のようで言葉ではない。やがて案内するものが出て、「根の国」の長老の許へ連れてゆかれる。そこには野兎の口を打った「姉妹の片方の娘」がいて、そして「姉妹のもう片方の娘」がいて、兩人とも狩人に紹介される。野兎の口を打った娘はひじょうに美しく、それにくらべて「もう片方の娘」は巖のように醜い。兩人いずれかを妻とせよと、父の長老の、ヒトの姿をしたものが言う。狩人は見目麗しい方を選ぼうとするが、三度まで、長老に引き留められる。ひとたびは、牛十頭に小さな牧草地をあたいとして醜い娘と。それを断ったので、次にはグラベアの林に清涼な井戸をあたいとして醜い娘と。それも断ったので、三度目は「根の国」の秘曲の笛をあたいとして醜い娘と娶せようとまで懇請されたが、断ったので、狩人と美しい娘を娶せた。だが、実は醜い娘こそそれを娶れば日々の苦患から逃れ、ヒトは不死の生を得ることができたのである。それ以来、うつし世から「根の国」へ容易に行くことができなくなってしまった。さて狩人が娶った娘はひじょうに美しかったが、それは樹が芽吹いて花が咲くことに似て、やがてはうつろう美しさでもある。それはヒトが生まれて成人し、壮齢となり、やがては老い死する、そ

のことを表している。ヤムタラの男が娶ったのはそのような美しさなのである。野兎を打った一撃は、口許から始まって野兎の体を一周し、野兎そのものを分割する。つまり、このようにして美しい娘は一方で双子のような醜い娘でもある。容易く死ぬヒトは一面では不死なのだ。深い闇の常在と、うるわしきプシケと。ひとはいつも過てる方を選ぶのだけれども。

## 脱出記

エクスダス

もうそこに住むことはできなくなったので、土地は捨てられ、一族の流浪の旅が始まった。族には、若いも若きも男も女もいたが、一族の成員のすべてに襲来したさいしょの生命の危地を脱すると、次には飢えがやって来た。こぶし大のマテ芋をそれぞれ六等分などして全員に行き渡るようにしたが、それでも壮健な男たちの幾分かに行き届くまでの量を確保することは難しかった。それから一族は西へ、五百キロほど移動した。驢馬や水牛は荷役のために必要だったので、女、子ども、年寄りも徒歩で移動せざるをえなかった。移動した先のキャンプ地では広大なテント村が設営され、それぞれの家の九族と、鳥、獣からなる五十二類がしばらくのあいだそこに留まった。食べ物の確保についてはやや改善が見られた。少しの耕作、少しの漁労、狩猟などとともに、近隣の村との交易もあったからだ。一族を悩ませたのは、良い水がここでは得られないこと、それと身を憩わせるべき木陰がないことである。良い水がなくても水はあるのだし、木陰がないことがただちに生存の危機と結びつくわけでもない。しかし、このふたつは時間が経つにつれ、人の心と体を蝕んで行くだろうことは、みなおぼろげならず感じていたことだ。支族の会議は紛糾した。少なくともここで一応は食えているではないか、という意見と、やはりより良い土地を求めてここを脱出するべきだという主張がぶつかった。これは、最終的には長老の見解に委ねられた。長老は、さらに西へ千キロ移動すべしと申し渡した。それで、異を唱えてそこに留まるものはいなかった。宿営地から目的地までの旅は辛酸を極めた。季節は冬に入っていた。泊まり泊まりの仮キャンプで、老人たちの中に風邪を引くものが現れ始めていた。そうして風邪を引いたと思ったら、妻や娘が手当てするひまもなく、あつというまに死んでしまうのだ。病人は、一刻も早くその場所を立ち去る必要があったが、移動することが負担となって却って死に至らしめてしまう。ここでも食べ物確保が焦眉の課題とされた。

結局、壮健者、若者、女・子ども・老人、また壮健者という具合に順を追って目的地に到達する。季節はやがて春になるうとしていた。新しい土地では気候も風土もすべてが以前と異なっていた。誰もがその土地に慣れようとしたし、作物も、その土地独特なものがあつたが、しだいにそれらに泥<sup>ネ</sup>んでいった。でも、だからといって、昔の土地のことを忘れただけではない。誰もが育む父祖の場所として、それは深いところに夢をみる信仰に近かつた。千五百キロ以上離れていても、同じ色の夕映えと、季節こそ違え同じ鳥のさえずりを聞いた。記念の日には盛大な祭礼と、花火の鳴り響きが止まなかつた。そこには一族だけにしか分からぬ深い悲しみの共有があつた。女たちには新しく赤ん坊が生まれ、土地はまた一つ精霊の秘密をひもといた。捨てることに代わつて得たのはむしろ痛切な智慧であり、それは何人も侵しうるものではない。そんなことを老パイソンが私に語つた。

## 父のまぼろし、わたしの笑顔

『何年にもわたる父親の病氣、これが彼女の委託の心を深めるもう一つの豊かな源泉である。父が受けた試練は若い娘の心を引き裂いた。父に精神障害の徴候が現われたのは、テレーズがカルメル会に入会してまもないころである。彼は、つじつまの合わぬことを言うようになり、ついで何日間も家から姿を消し、幻覚を見、いつもだれかが気をつけていなければならぬ状態になり、意識がはつきりしている時はしだいに少なくなる。カルメルの娘たちは、心配に震える心で病状の進行を知らせる手紙を読む。しかし信仰深い父が万難を排して末娘の着衣式に出席できたことは、テレーズの心の暗闇に一条の光線を投げかける。それは父にとって苦しい受難を前にした地上での最後の祝日だった。そして、その受難は父一人にとどまらなかったとテレーズは書く（自叙伝A）。

一か月後の一八八九年二月十二日、父はカンの精神病院に入院しなければならなくなる。テレーズは、自分も砂粒のように皆の足の下で辱められ踏みつぶされる思いを味わう。自叙伝の中には《私たちの最愛のお父様は、すべての杯の中でも一番苦い、一番恥づかしい杯をお飲みにならなければなりませんでし……》とある。《ああ！あの日には、私は「もつと苦しめます」などと申しませんでした!! 私たちの心配、悲しみは、とても言葉には表わせませんから書かないことにしましょう。いつか天国で、この栄光ある試練について楽しく語り合うことでしょう。もうすでにそれを苦しんだことを幸福に思っているのではないのでしょうか?…:…:そうです。パパの殉教の三年間は、私たちの生涯で一番実り

豊かな、一番愛すべき時期であったように思えます。私はそれを聖人がたのどんな幻示、どんな脱魂とも取り替えたくありません。この値知れぬ宝のことを思うと心は感謝にあふれます……》（自叙伝A）。

「テレーズ 空の手で」C・D・メーステル・福岡カルメル会訳より

時々、どこを歩いているのか分からなくなる。空は青いばかりで果てしなく遠い。選んでいる道はこれでもいいのか。神に身をささげるように（？）父の介護に身をささげているわたしの人生ってこれでもいいのだろうかとい続けても仕方ないので、ぼやんとしている。少し口を開いて。あほかもね。あはやもん。リジューのテレーズの本を出してきて読む。聖人になったテレーズでさえこんなに変身うなんだからきままに生きているわたしが迷ってもあたりまえのことなんだと思う。身体はどこが病んでも病でしかないのに、どうして脳の病氣は「すべての杯の中でも一番苦い、恥づかしい杯」なんだろう。人のこころに巢食う「あんなふうにはなりたくない」と思う悪気のない願いに、当事者や家族の胸は痛む。

120年前と今では病に対する認識も医学の力も違うだろう。決定的な力はまだなくても症状に対応できる薬の出現や脳を活性化させる生活についての研究も進んでいて絶望しなくていいよと教えてくれる。へ想像もできないほどの大きな十字架」という認識もわたしには淡い。だが、症状が少しずつ進んでいく穏やかな日々の隙間に、突然、父のまぼろしはやってくる。父はまぼろしが現実であるか

のように鬼のような形相で激しく語り出す。まぼろしを受け入れないとわたしは悪者だ。

自分を否定するひどいヤツになる。暴言を吐かれる。あほかぼけえ。お前なんか世話になっていない。親の言うことが聞けないのか。

しかし、うんうん、あーそうなんやと相槌を打ちまぼろしを受け入れると、立ちにくい足で外に出ようとしたり、どんだんエスカレーターして親戚に電話しろと言ひ、周りの人にもつじつまの合わぬことを言い出し驚かすことになる。空気は凍りついている。まぼろしを理解して聞き解くのはたいへんな想像力がある。が、出来ないことはない。まぼろしは父にとつてリアルな映像なのだろうが、夢に見たことであつたり過去の出来事とデイサービスでの出来事がまざつたものであつたりする。それをおさえる薬もある。だから飲ませて、落ち着くのをそつと待つ。まぼろし騒動後のわたしはとても消耗している。

どこまで続くのか分からない砂漠を砂塵の向こうに感じる。お日様だけを頼りに歩いていような錯覚にとられる。わたしは、詩のようなものを書いてきたのに、とっさにまぼろしに対抗する言葉を持っていない。無力だ。ないことをありありと語る父の勢いに息を飲み、頬はひきつり沈黙してしまう。ナイフがある、ナイフがあると言う父にわたしは言葉を持っていない。笑顔も持っていない。そのことがくやしい。なんとか、少しでも父のまぼろし発言による凍りついた空気を緩ませたい。ぼけぼけになつた父を笑わす大ボケをかませないかと思つている。まぼろしを暖かく受け止め、次の瞬間に優しくつつこみ笑わせたいのだ。でも、わたしにはそのような力はない。たまたまなくなつて、まれびとのように田舎町にきてくれる芸人の嘶を聞きに行つたりテレビのお笑い番組を見て「笑いにくいこう」とする。彼らにもつと楽しく生き抜く言葉の力と間となごやかな笑顔を教わりたいたいと思ひながら……。あほかもね。あほやもん。ぼけぼけになつた老人を笑わす大ボケの言葉はどこにあるんだろう……。それを瞬時に

出せるセンスを身につけたい、言葉がないなら笑顔と言ひ言葉で反撃したい、そうすれば父が地上から飛び立つた後に、また父のような人のために役立つ人生が送れるかも知れない、いや、自らのために本当に楽しく生きられるのかも知れないと願ひながら。

## 阿寒の渡辺さん

阿寒の渡辺さんが亡くなった。通夜のときに初めて、渡辺さんの年齢が68歳だと分かった。三年前に知り合ったときに63歳と聞かされていたので、少しだけ計算が合わない。

遺影は若くもなく、最近のものでもなくて、わたしの知らない渡辺さんのすべてがそこに漲っているように見えた。断片的に聞かされていた話をつなげると、材木の運搬など山仕事に従事したり、熊を撃つてジープを買うほどの収入を得たり、後半は土木の会社で重宝がられて、定年を過ぎてもなかなか足を洗うことができなかったらしい。

「俺は辞めるぞ、遊ぶぞ」と宣言して、強引に会社を振り切つて、年金生活に入っていた渡辺さんと知り合ったことになる。しかしその後、頼まれ仕事が途切れず、ユニックと重機を運転する作業着姿が、最後まで渡辺さんのスタイルだった。

4月に東京から電話を入れて、わたしが脳出血で釧路の病院に入院していたことを報告した。すると、

「俺も病院から戻ったばかりだ」と言う。

「検査入院だ。結果が分かったら、また入院するかも知れない」

「えっ？ どこが悪いんですか？」

「肝臓だ。あんまりよくないぞ。肝硬変にはまだなっていないけどな」

いつもと変わらないぶっきらぼうな言い方で、はにかむような笑みの気配も手に取るように伝わってきた。肝硬変になっていないのに、あんまりよくない、というのがぴんとこなかったが、病状が深刻だとは考えなかった。今まで病院とは縁がなかったようなので、ちようどいい機会かも知れない。入院して治してもらって、年相応の弱さと用心深さを身につけて戻ってくる。それは渡辺さんの本意ではないかも知れないけれども、むしろそんな

な渡辺さんの方が無理がないように思える。頑丈で、なんでもできて、肉親や友人たちからも頼りにされ、自分でもまだまだ大丈夫と思いたがっている。もしも本当に弱っているのだとしたら、弱っている証明書を誰かにきちんと出してもらった方がいい。

実際はそのときにはもう、肝臓の癌が10センチにもなっていて、手術をしようにも手のほどこしようがなかったらしい。渡辺さんの言葉が曖昧だったのは、おそらく医者が曖昧にしか伝えられなかったのだろう。

7月に入つて北海道での作業を再開し、二度目の電話を入れた。その頃にはもう、渡辺さんの病状がよくないという話が耳に入ってきていた。それでもまさか、その月の末に亡くなるとは思わなかった。

電話に出た渡辺さんは、わたしとの約束が気になっていたのだろう、

「一時帰宅できるかも知れないから、そのときに材木を運んでやるよ」と言った。不思議な気がした。よくなっているのだろうか。

「そんなこと考えないで、ゆっくり病気を治してくださいよ。材木は、あとでどうとでもなりますから」なんだか押しつけがましくなっていると感じながら、わたしは言った。

不思議な気がしたのは、渡辺さんの声に変わりがなかったからだ。あとで思うと、いたずらっぽい笑みの気配が薄かった。わたしの言葉に黙り込んだのも、変といえば変だった。気持だけで、わたしのところに古材を運ぼうとしたのだろう。

去年の夏、50キロ以上ある、阿寒の渡辺さんのところへ何度も通つて、草に埋もれかけている古材の整理をした。

その日は、奥さんはいつものようにひとりで畑仕事、渡辺さんは近所で頼まれた小屋の解体作業に出かけていた。昼になって、ご飯

を一緒にどうですか？」と奥さんが声をかけてくれた。渡辺さんもまもなく戻ってきて、三人でテーブルを囲んだ。持参したコンビニ弁当を食べ、茹でたジャガイモにバターをつけ、カボチャもごちそうになった。子供の頃の我が家の日曜の昼飯と同じなのが懐かしかった。

渡辺さんは上半身裸になって肩を落とし、疲れた顔をしていた。見慣れている精悍な仕事着姿の渡辺さんと違って、まばらな白い胸毛が痛々しくみえた。わたしは思わず、

「仕事、手伝いましょうか？」と声をかけた。わたしもかなり疲れていたのだけれども。

渡辺さんは困ったような顔をして、「いいよ」と、肩を落としたまま答えた。そのときすでに、肝臓の癌は進行していたのだと思う。

スタートが遅れたせいで、山積した作業に追われ、なかなか見舞いに行けないでいるあいだに、衰弱が激しいので面会を断っているという話が聞こえてきた。放射線と抗ガン剤治療の影響もあって、奥さんと会話するのも困難になっていたらしい。亡くなったあと解剖すると、癌は検査をしたときよりも大きくなっていたそうだ。

「どうせだめなら、治療しないで帰して欲しかった」奥さんがあとでわたしに、口惜しそうにそう言った。

もしも渡辺さんと知り合っていなかったら、と考えることがある。最初の年、まだなにもない盛り土の上に立つてわずか二ヶ月後に、渡辺さんと知り合った。資金も足りず、建物の構想もはつきりせず、家を作ろうとする意志と、家が形になっていくことへの怖れのあいだで、気持が揺らいでいる時期だった。

たまたま東京から釣りの好きな友人が遊びにきたので、近所で最初に親しくなった小川さんに相談すると、釣りや山に詳しい人がいるので頼んであげるといふ。それが、小川さんの遠縁にあたる渡辺さんだった。

愛想のない人だった。無口で、不機嫌そうに見えた。林道をどんどん先に行く渡辺さんの車を追って、わたしたちは原始林の奥深く

分け入った。北海道生まれのわたしも、そんな奥に入るのは初めてだった。大きなニジマスがたくさん釣れた。

釣りのあと、車を追って原始林を抜けたと思ったら、渡辺さんの家に着いていた。そこで、渡辺さんの無愛想が、子供の内気みtainなものから出ていることがなんとなく分かった。わたしたちを家に案内したのは、作りかけの丸太の小屋や、巨大な材木を輪切りにして磨いたテーブルを見せたかったからだ。大きな倉庫の中は、古道具やがらくたでいっぱいだった。小屋の屋根はトウキビの茎で葺くつもりだと説明した。

テント暮らしをしていて、ストーブの薪に不自由していることを話すと、松林の縁に伐って倒してある太い丸太の山を指さして、「軽トラ3台分くらいなら、持って行っていいぞ」と言ってくれた。

その日がきつかけになって、古民家を解体した古材や、倉庫に保管しておいた床材なども全部わたしが貰うことになった。つまり、渡辺さんがわたしの家作りの道を決めたことになる。もらった材を生かし切ることが、わたしの使命になった。

いつだったか、わたしに告解でもするみたいに、「若いときは悪いことをいろいろした」と、ぼそつと言ったことがある。わたしの言葉遣いが丁寧で、真面目な人間に見えたのかも知れない。渡辺さんがどんな悪いことをしたのか、それ以上聞かなかつたし、わたしも悪いことをしました、とも告白しなかった。若いときはみんな悪いことをする。過ちとか後悔とか、やったことをすり抜ける便利な言葉はいろいろあるけれども、本当は取り返しのつかないことだらけなのだ。しかも、そのことを殊勝に振り返ったりすると、よけいひどいことになる。世の中には後ろ指を指されない人がいるし、後ろ指をさされない生活があるなどと思いきや、人生を窮屈に生きることだけはしたくない。すべて忘れて、釣りや小屋作りを楽しんで生きようとしていた渡辺さんの老いを、もつと眺めていたかった。

## 尾内達也の試み

尾内達也の処女詩集『耳の眠り』は、俳句から詩に何が学べるか、という試みで一巻がつらぬかれている。筆者あとがきによれば、この問題意識は清水昶氏より提示されたものという。

詩人の清水氏が作句をおこなうものであることはつとに知られたところだが、それよりも意外だったのは、またなんと懐かしいお名前を聞くものか、という感慨である。実を申せば、清水昶氏は私がこの世界にデビューするきっかけを作っていたのだ、私にとつては重要なお一人であった。もう四十年近い大昔のことになるが、今でこそ一種の薄い嘲りや憐憫の表情を以て語られるこの詩人が、飛ぶ鳥を落とす騎虎の勢いであった時代のことを、知る人少なく、語る人はさらに少ない。私もむろん例外でなくみな忘恩の振る舞いをこの詩人にしてきたわけだが、詩への思いはこの詩人にして断ちがたく、それは一万余の数の矢数句となつてその囊中に納められてあるという。

もとより尾内達也氏と清水昶氏がどのような仲らいであるのか、つまびらかにはしないが、尾内氏にとつては如上の清水氏の事蹟とはある意味無関係な「公案」として、俳句から詩に学べるものはなにか、という問いが手渡されたのだと思う。要点はいくつかあると考えられる。整理してみよう。

まず、俳句そのものが詩行のうちに「露出」しているものが挙げられよう。次に、俳句そのものではないが、「俳諧」的世界が詩行に内在して展開しているものを数えることができ。また、音数律、ありていにいつて七五調が詩行の全体を律しているもの。さいごに、英語詩に現れている問題が存在するが、これ

は稿を改める。これらにおいて、俳句また詩に「詩」は成立しているかを吟味したい。

まず俳句そのものの「露出」状態を見てみたい。「無題、あるいは一つの追悼詩」「夜への越境」「釣り」「暦」などがそれにあたる。この「露出」の近辺を示せば、たとえばこんな具合である。

地上を照らす月に日の  
あをあとと またあかあかと

海を信じた者たちへ

深く蔵してほのかなる

月に日やこれが最初の村祭

「無題、あるいは一つの追悼詩」

ことばは消える

踊るのみ

気が狂えば狂うほど

花にちかくなる

石ころ一つ

夏野へ投げて

深い淵の音を聞く

「夜への越境」

おいら誰だったんだろう

誰でもないさ

おいら誰だったんだろう

誰でもあるさ

なあ 鳴海さん

たまには声を聴かせてくれよ

天外や夢の中にも秋は来て

「釣り 鳴海英吉に」

窓辺で

少女が島唄を歌っている

だれかに呼ばれて

突然 歌声が途切れた

邯鄲や歌のあとさき消えしまま

(後略)

「暦」

この中では二つ目の「夜への越境」が、果たして定型の意識を以て書かれたのかそうでないのか少々疑わしいが、作者の意識はどうあれ、これが限りなく音数律的なものと矛盾しない形であるとは言うことができると思う。行に分かたれた分、却って詩的な喚起力が生じているようにさえ思える。

また話は前後するが、さいしょの「無題、あるいは——」は、この引用箇所だけを探り上げれば、口語詩ではなく、音数律的な文語文に引き寄せられたものと見ることも出来ようが、この詩のこの他の詩行は完全に口語自由詩的である。善し悪しは別にして、総じて通俗歌謡曲的な感じが強まっているのではないか。

これ以外の二つは、いわば詩行にぶつちがいに打ち付けられた鏝であり、連と連とを「断裂」的に結び付けている、と見ることができる。谷川俊太郎はじめ、多くの先人がおこなってきたのはこの形であろう。その意味で、牢乎としたフォルムを持ち、人気がある。但しこの居心地の良さに安住してしまうと、詩の動きが、つまり詩が、失われてしまう危険がある。

これらを畢竟するに、音数律的な要素と口語的要素のあわいに、詩の内奥の韻律をひびかせられるか否か、ということが懸けられているのではないかと思う。

次に、俳句自体ではないが、いわゆる「俳諧」的世界が詩行に内在して展開しているものを採り上げてみる。おおむねこれは「時

制」と総題された第Ⅱ部に集中している。これと、次の「七五調が詩行の全体を律しているもの」とを分けたが、この二つは同じ括りの小区分とすべきなのかも知れない。とまれここに「俳句」自体は顕在していない。例を挙げるまでもないが、これらは七五調が主旋律のものとして併せ、第Ⅱ部の作品群のほぼすべてと重なる。「俳諧」的世界の展開としては、次のような例が典型的である。

耳を澄ますと

森の奥から

風鈴に似た音楽が

とぎれとぎれに

聞こえてくる

言葉なのか音楽なのか

聞き取れたと思つたとき

燃える村が見えた

一筆書きのような暮らしが見えた

「水の森」

言葉は完全に口語自由詩のそれだが、背景は一種の定型的な感性を前提としている。表現としても優れたものがあるのではないだろうか。だが、これでは、このままでは、決して定型それ自体や俳句自体にはつながらないだろう。定型もしくは音数律なもの(口語的な)地の詩行とのあいだでは、片方が出現すれば必然的にもう片方が姿を消すといった排中律のような機制が働いてしまうからだ。音数律と口語自由詩とは、いわば地続きにならないのだ。

あるいは最初から七五の音数に律せられた形を選ぶ、それ以外は選択しない、というやりかたもある。これも例示してみる。

初花や

命ときとして地獄

流れ流れて

たうたうと

川あり海あり入り江あり

たうたりたり たらうたらうたり

## 「初花」

音数律がおのずと感性を規定してしまう、といった側面があるように思う。一行目の「初花や」の「や」がどこまでも俳句的な切れ字に近く、また全体的に言ってもその内容が「歌謡」もしくは「歌謡曲」的である点を差し引いても、寧ろここには所謂「俳味」があるとは言い難い気がする。そこにあるのはある種のマイナスに流れる「情調」にほかならない。表現としては、俳句的世界の成立は一旦頓挫していると見るべきだろう。さきにも述べたが、問題は「音数律的な要素と口語的要素のあわいに、如何に詩の内奥の韻律をひびかせられるか」ということなのだ。

ただし、第Ⅱ部を概観すると、強ちそこに否定的要素ばかりがあるのではない。たとえば、そこにある永田耕衣や鳴海英吉などの俳から俣ばれるのは、ある東洋的要素であり、それが永田耕衣であれば「禅」的な覚悟者を連想させるし、鳴海英吉であればその不授布施派の研究を通じて出来上がる仏教者のイメージを否定しにくい。やや性急に言ってしまうと、ここで媒介されるのは、東洋、あるいは非西洋という鍵なのではないか。この磁場なら、「仏教」も「門」も「舞い狂う言霊」も「鳥唄」も「イランカラプテ」というアイヌの言葉も、一種の軛を離れて担保される気がする。つまり、そういう客観性があると感じられる。この軛を近代主義や合理主義と捉えきつてしまうと、また一筋縄ではゆかない隘路に陥るわけだが。

そうしてこのように迂回して来たって初めて、音数律的なものと口語詩的なものが地続きになる可能性が見られる。この場合、どういうことが起こるか。以下の発言を見ておこう。

何がだいなことかというのと、改行のまえの一行と、改行のあとの一行とが、まったく対等に並ぶ、つまり平等だということ、しか

も一行をどんな長さで書いてもよい、自由なのだから、近代詩も現代詩も、その本質は平等だという言い方に尽きる。自由詩の本質はそこだ。(藤井貞和『日本語と時間』6章)

この響みに倣えば、思い切って言ってしまうが、定型詩の本質は非平等だということになろうか。けっしてフラットなものではない。定型詩は時間に限りが存在する。ところが、自由詩にはそれが無い。定型詩は垂直的であり、口語自由詩はどこまでいっても水平的である。

過程的なありかたとして、七五の音数律でどこまでも詩の状態を継続させるということがあろう。その完成形のような形を、たとえばの話、藤村の『若菜集』などに見ることができる。七五の継続でどこまでも続くというありかたは、しかし一回ごとに成立する定型詩にはけっしてなかったことだ。あるいは、『日本語と時間』でも言われている如き、一定数を限度とする連歌・連句に、可能態としては潜在していたのかも知れない。音数律的なものと口語自由詩的なものが触れ合う接点は、たぶんそのあたりだ。

別の言い方をすれば、定型詩にはそれを創造した作者はおらず、自由詩にはそのたびごとの創造者がいる、とも。このときの自由詩の平等は、時間の開放・制御にまで及んでいく。時間が自由になったのか、不自由になったのかは別にして

それで、清水昶氏の公案は解決されたのだろうか。俳句から何が学べるか、と言ったとき、私は清水氏の表情が見えるような気がした。奇妙な物言いだが、氏は、俳句で詩を書こうとしておられるのではないかと思った。ある種の見果てぬ夢としての詩を。私は清水昶氏のことを徹頭徹尾口語自由詩詩人であると考えているものである。

結論から言ってしまうと、「音数律的なものと口語詩的なものが地続きになる可能性」は見られるとは言え、定型詩の本質が「非平等」であると見切れば、理論的にはむづ

かしいと言わざるを得ない。寧ろ思うべきは、定型詩と自由詩の間にどうしてこんな裂け目が生じてしまったのか、われわれの側に硬直したもののとらえ方がなかったかどうか、よくよく考えてみるべきだと思う。

顧みれば、中世から始まる連歌や江戸期の連句俳諧のほか、われわれは天明期の狂歌、柏木如亭の『聯珠詩格』、蕪村の俳体詩や口語自由詩、幕末のオランダ詩の翻訳その他、豊富な言語の富を所有していることを忘れてはならないと思う。それらはすべて、音数律的なものと自由詩的なものが触れ合う接点にほかならなかった。可能態としては幾筋もの途があり、そのすべての可能性がそれぞれに有機的に生かしめられている、と私は思っている。

## confidence

ラ・フォル・ジュルネにデジャー・ラー  
ンキのリストを聴きに行くつもりでチケットを握りしめていたが、急にコンサートの中止になった。来る予定だった人々が来なくなつた一方で、急に来る気になつたジェーン・バーキンのような人もいる。バーキンさん、何度も日本に来ていますが、桜の季節は初めてだと、手に桜の枝を握つて笑っていた。枝、折ってしまったのか。

(後藤)

逃げるが勝ちという思想には、強固な意志と想像力と行動力が必要なのだと分かつて。苦小牧で八戸行きフェリーを待っていて、地震が来て、津波警報が出ているのに、どうなつてるかな、とフェリー乗り場まで様子を見に行つたわたしは、この思想が身についていない。(木村)

つい先日終わった「昨年度」は私にとつて、まるで人生の折り返し点のような、散々な年でした。まず、12年間住んだ代々木の部屋を叩き出されました。私が借りていた部屋の下の建て付けが致命的に老朽化したらしく、そこをどうにか直して、昭和38年竣工の「マンション」をまだ使い回したかつたらしく、本来なら「立ち退き」として、次に住む物件の斡旋、最初の2年間の家賃の負担など、当然貸し主が負担すべきものを、一切の詫びもなく、不動産屋が雇っている弁護士の奸計によつて、立ち退き料零円で、私は転居を余儀なくされました。住処を失うこととなつた私は、それなら生まれたところへ戻ろう、と言うことで、辺境の地・府中で見付けた1Rのマンションに、パソコンだけ持って、転がり込んだのです。ところが、神は私を見捨てませんでした。新しい部屋は南西の角部屋で、陽

当たりが抜群によく、加えてエアコンとシャワーが完備されていたのでした！

代々木の「マンション」は北西の角部屋で、風呂がなく、いつ潰れるかと常に不安に苛まれながら、12年の永きにわたり、代々木で唯一の、銭湯へ通い続けるという暮らしを、私はしていました。そして、12年間一度も掃除をしなかつた私の部屋は、真正銘のゴミ部屋と化しており、トイレには入れない、パソコンは使えない、と、住んでいる私自身が、「もう独りでは片付けられない……」と匙を投げるほどの凄まじさだったので。そのゴミ部屋から、解放される！ また零からやりなおせる！ 府中に移つて、どれだけ私が「自由」になつたか、これは、私の貧しい語彙では、とても言い表すことが出来ない祝福だったのでした。

(他にも、「手帳が取れた」「詩集が出せる」など、おおきな話題は数々あるのですが、長くなりましたので、今回はこれで終わりにします。ほんとうによかつた！)(野村)

世話になんかなくてないぞと憎たらしい言葉を吐き散らす父は、人間そのものの姿のようです。わたしをちっとも疑わない父は、信仰とはこんなふうに赤子のように信頼することなんだよと教えているようです。背が曲がり、腫が濁り、零落した神のごとく異形の姿になっていく父におかしがたい聖性が宿り、年老いていくのに日々新しく生まれているようです。(福島)

芭蕉七部集冬の日を読んでいて、杜国に《泥のうへに尾を引<sup>ひ</sup>鯉を拾ひ得て》という一句あり。これは莊子の内篇第一逍遊篇の一エピソードによるもの。これにいたく共感し、この詩を書いた次第。ご興味ある方は、莊子のこれを読まれんことを。(岩田)

人づてに聞いた話だが、3月11日の新橋演舞場では、揺れる舞台上で役者たちが最後まで台詞を言い切り、幕が閉まって、吉右衛門が「これにて」と切り口上を述べたとのこと。見に行った人は満足したらしい（帰れなくて大変だっただろうけど）。結局この日を含めて、演舞場は4日休んだだけだった。国立は仁左衛門で安い席が売り切れるくらいになっていったが、11日以降、3月は休場になってしまった。こういうときに、それぞれの特徴が出るものだ。（長尾）

感覚的な好みが他者と似ているということとは一体どういうことなのだろう。詩歌・小説・美術・音楽・映画・演劇作品についてある人とたまたま同じものが好きだったとする。その事実を以てその人と感覚・感性が似ていると言うのは簡単だが、果して事態はそんなに単純であろうか。そこにはさらにその対象がメジャーなものであり普遍的・圧倒的な魅力を持つ作品なのか、マイナーなものであり異端で少数の支持者しかいない作品なのかという問題が絡む。メジャーな作品を好きな人がいくら複数いても何ら不思議ではないから、それを以て感覚が似ていると言ってしまうのは違うような気がするし、それではマイナーな作品を共通して好きな者同士にだけ感覚の共通性を見るのも少し行き過ぎのように思える。最近日本人離れたサウンドの森雅樹・中納良恵の二人組のバンド EGO WRAPPIN' に魅せられたことを契機にふとそんなことを考えてしまった。（秋川）

緑生い茂る季節だというのに、大変な災禍が未だ止まぬ。止まぬどころでない、明日をも知れぬ状況。比喻ではなく、いい人ぶるのでもなく心痛がする。こないだ古本市に行った。ある寺社の境内、よく晴れた

日である。若き日の木田元や吉本隆明の本、スピノザを買い求める。スピノザのエチカ上巻の第一部を読み終える。苦境の中如何に曇りなき目で事物に向かうか、その勇氣と決然たる態度に触れるようだ。（石川）

東北大震災後のさまざまな言説。それについて語る、言説の言説の氾濫に反吐の出るような思いで耐えてきた（これもその無数の言説の一つに過ぎないが）。それらをすべて読んだわけではないが、目についたものは、思い出しても胃が痛くなる。あいも変わらぬ自己顕示や宣伝めいた臭みが紛々とする表現。それが（自己）表現の表現たる所以であるというなら話はそこで終わりだ。でも、文学や詩の表現がそれで尽きるものでもないはずだ。まさに未曾有の地震・津波・原発震災の被災者、被災地の現状をどう捉えているのか、そこに自らのエゴや欲望（書くこと）がいかなる仕方でかわり合うとするのか、そもそもかわり合う余地がそこにあるのか（許されるのか）などを考えること。私はこれらを少なくとも最小限の自問と考えている。大震災に関するいかなる種類の「言説」も、自らに問う、あるいは自らを問う姿勢の見られないものは読むに耐えない。（水島）

3月11日神奈川フィルの公開リハーサル（マーラー6番、指揮・金聖響）を見に行くつもりだったのが、前晚から咳がひどく結局諦めた。行っていけば楽団員と一緒に帰宅難民になっていた。惜しいことをした。（和田）

前の詩集を脱稿したあと、新たな連作に取り組んでいる。体の不調と大震災と相次いでやって来たが、何とか宥め宥め五作目まで書き終えたところだ。われわれに残されているのは書くことの他、ない。（倉田）